

第2部 政治参加が社会を変える

はじめに

国会議員となって6年近くがたちました。

この間初心を忘れず、NPO活動への支援、待機児童解消への取り組みなどの子育て支援、途上国における貧困対策支援等々に誠心誠意取り組みできました。結果、進展、改善が図られたものもありますが、なかなか思うように進んでいない事柄もあります。

参議院議員として、国政の中核で、諸課題の解決にあたる中、日々実感しているのが、国民の、市民の皆さんの力の大きさです。法律をつくる立法府・国会の議員たちはもちろんですが、行政を担う官僚の方々も、おそらく想像している以上に、国民の皆さんの意見や動向に注意を払っています。

しかし、政治に対する国民の関心が薄かったり、国民の政治に対する関わりが適切になされない場合、政治家や官僚はどうしても独りよがりになったり、場合によっては、「党利党略」、「派利派略」、「省利省略」に走ったりしてしまうこともあります。政治の責任は言うまでもありませんが、国政の質を上げるのも、下げるのも、最終的には国民の皆さんの政治への参加次第ということになるのではないのでしょうか。政治が悪ければ、生活も悪くなり、皆さんの政治への参加意識が高まって、政治が良くなれば、生活も良くなるのです。

しかし、日本では、「政治アレルギー」とも言える傾向が根強くあります。皆さんも経験があるかもしれませんが、真面目に政治について語ると敬遠されたり、空気を読めないという扱いをされたりします。何よりも、日本人の多くは政治や政策について、ほとんど話し合うことはありません。「自分とは関係ないもの」として、触られない状態にあると云っていいでしょう。しかし、政治は、決して「自分とは関係ないもの」ではありません。年金、医療、介護、子育て、教育、食の安全という身近なものから、原発、エネルギー、貿易自由化、外交戦略と大きな課題まで……。一つ一つの政策に対する可否の判断が、自分の今および将来に、そして私たちの子どもの将来に確実に関係してくるのです。

私は、日本人が「政治は自分とは関係ないもの」と考えがちなのは、「政治家は自分とは関係ない人たち」で、しかも、信用できず、嘘ばかりつき、悪いことを考えている、という通念から来ている面があるのではないかと考えています。

私は、第1部で述べましたようにちょっと個性のある経験をしたかもしれませんが、政治家の娘でも、有名なタレントでもない、二児の母親である普通の働く女性です。国民と政治の間に距離がある中で、私のような者が政治の世界に入る、政治家になるということ

自体に意味があると思いました。

私は政治家として期を重ねたとしても、あくまで「普通目線」で政治に取り組みます。普通の主婦として、普通の母親として、普通の生活人としての視野と立脚点を守り続けることが、自分が政治家である意味だと堅く信じているのです。

その思いから、特に皆さんにわかっていたいただきたいのが、国民の思いが国や社会を変えるところということです。身近なところから政治は変えられるのです。「一人ひとりが、地に足が着いた形で、政治との関わりを増やしていく。それにより、国民と政治との距離を縮め、最終的に政治の質を良くしていく」——このことが政治家として私がつとも皆さんに訴えたいテーマの一つです。

これから、具体的に、「身近なところから政治を変える方法」について、提案をしていきます。

また明日、お楽しみに！